

【原 著】

幼児を対象とした集団における絵本の読み聞かせに関する 研究動向

會澤 のはら 片山 美香 高橋 敏之

The Research Trends of Reading Picture-Books to Children in a Whole Group Activity in
Early Childhood Education and Care

Nohara AIZAWA, Mika KATAYAMA, Toshiyuki TAKAHASHI

2019

岡山大学教師教育開発センター紀要 第9号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.9, March 2019

原 著

幼児を対象とした集団における絵本の読み聞かせに関する 研究動向

會澤 のはら※1 片山 美香※2 高橋 敏之※2

本研究では、日常の保育で頻繁に行われる、集団での絵本の読み聞かせに関する実践的な研究を概観し、充実した絵本の読み聞かせのあり方に関する知見の整理を試みた。その結果、絵本の読み聞かせ場面における幼児の言動は年齢に沿って変化し、4歳児から5歳児に至る過程において、集団という特徴が活かされるようになることが明らかになった。

3歳児では、保育者と幼児の個別の関係性が優位であったが、4歳児では徐々に幼児間の相互作用が広がり、他児の発話を繰り返したり、幼児と笑い合ったり等、他児を意識し、一緒に楽しむ共有化が進む。さらに、5歳児になると友達と共に内容の展開を楽しみながら、集団での読み聞かせのマナーを心得た態度を示しつつ、個別の言動の表出を調整する姿が見られるようになることが示された。質の高い読み聞かせにより、幼児の確かな言葉の発達を促す機会に成り得ることが確認された。

キーワード：幼児、絵本の読み聞かせ、集団、保育者、共有過程

※1 岡山大学大学院教育学研究科発達支援学専攻幼児教育コース（大学院生）

※2 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに

幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園において、集団を対象とした絵本の読み聞かせは、日々の保育において多く実施されている。とりわけ、降園前や昼食前等の活動の合間を用いて多く行われている（横山・水野，2008）。しかし、保育における絵本の読み聞かせの利点は、単に活動のつなぎとしての働きに留まらないはずである。幼稚園教育要領（文部科学省）において、絵本の読み聞かせの有用性はそのように記述されてきたのであろうか。

1956年版の幼稚園教育要領では、「言語の使い方を正しく導き、童話、絵本等に対する興味を養うこと」、「興味をもって絵本などを見たり、絵について話したりするようになる」といった記述が見られ、絵本を通して教師や他児と話し合うことに重点が置かれている。

続く1988年版では、絵本を通して教師や他児と話すという内容は削除されている。「絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにする」など、絵本を通して想像する楽しさを味わい、豊かなイメージをもつことが重視されている。

次の1998年版では、「先生や友達と心を通わせる」、「内容と自分の経験とを結び付け」、「言葉に対する感覚を養う」という文言が新たに登場する。絵本の読み聞かせを通じた他者との共感が新たに重視され始めた。また、絵本を通して豊かなイメージをもつことに関連して、幼児の実体験と絵本の内容を結びつけることを重視して

いる。さらに、1956年版と記述内容は異なるが、絵本と言葉の関連性を高く評価している。

2008年版においては1998年版と大きな違いは見られない。しかし、領域「言葉」の「内容の取扱い」における記述がやや異なる。1998年版では「その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりする楽しみを十分に味わうことによって」と述べられている箇所が、2008年版では「その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって」と記載されている。2008年版では、絵本を読むことによって得られる楽しみの質をより広く捉えていると考えられる。

2017年3月には、「幼稚園教育要領」が「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」と共に同時改訂（定）された。3歳以上の幼児の「幼児教育の共通化」が施行され、幼稚園、保育所、認定こども園のいずれにおいても同じ方針のもと、幼児教育が展開されることとなった。この中で、小学校以降の学習の場で必要とされる「資質・能力」、すなわち「個別の知識や技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の育成、及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確化された。幼児期以降も含め一貫した教育の方向性を示すと共に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭におき、日々の保育を計画的に実践することがより一層求められるようになった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」には、領域「言葉」のねらいでもある「言葉による伝え合い」が示されている。「絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け・・・（後略）」との記述が見られる。言葉の獲得のねらいに沿い、絵本や物語を介した言葉や表現力の育ちを企図する内容と言えよう。また、領域「言葉」の「内容の取扱い」においては、新たに「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」が追加された。絵本や物語を積極的に保育に導入し、豊かな言語獲得の環境を意図的に創り出す保育実践が求められていると言える。共通化された領域「言葉」のねらいにおいては、第3の文言に「言葉に対する感覚を豊かにする」という文言が付加され、「3. 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」は、「3. 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」に改められた（下線は筆者による加筆）。無藤（2017）は、この「言葉に対する感覚」の文言が新設されたことを受け、保育者が果たすべき役割として、言葉そのものへの関心（言葉の響き、リズム、新たな言葉に触れる等）を促して、言葉の楽しさ、面白さ、微妙さを感じる物語絵本を与えたり、言葉遊びの場を充実させたりしていくことが重要であることを指摘している。幼稚園教育要領解説（2018）には、絵本を通して先生や友達と心を通わせることや、豊かなイメージをもつことも引き続き重視されていることが分かる。

絵本を介して、「先生や友達と心を通わせること」、「豊かなイメージを形成すること」、「豊かな言葉や表現を身に付けること」をねらいとして、言葉に対する感覚を

豊かに育むための保育実践が期待されていると言える。

以上、幼稚園教育要領における絵本の意義・有用性の変遷を見てきた。幼児教育では、絵本や物語に親しむことが重要な育ちの機会と位置づけられていることが確認された。それでは、絵本を介して、具体的にどのような実践から、幼児の育ちの姿が導かれるのであろうか。その方途は十分に明示されていない。そのため、各保育者が工夫を凝らしている実践に関する研究からその知を整理することは意義あることと考える。そこで、本研究では、日常の保育で頻繁に行われる、集団での絵本の読み聞かせに焦点を絞って実践的な研究を概観し、より充実した絵本の読み聞かせのあり方に関する知見の整理を試みる。

Ⅱ 幼児を対象とした絵本の読み聞かせに関する保育実践研究の概観

1 文献検索の基準と検索方法

文献検索の基準は、(1) 我が国の幼児を対象とした絵本の読み聞かせに関するもの、(2) 幼稚園・保育所・認定こども園のいずれかにおける集団保育の中の読み聞かせの実践について言及されているものとした。本研究の目的に合った文献収集を行うに際して、CiNii, J-STAGEの電子ジャーナルデータベースを使用した。年代は1990年～2017年(過去27年間)に限定し、「3歳以上」、「幼児」、「絵本」、「読み聞かせ」、「保育」、「幼児教育」をキーワードとして用い、検索を行った。

2 結果及び考察

文献検索の結果、95本の論文がヒットした。その中から幼稚園、保育所、認定こども園における集団を対象とした読み聞かせに関する研究を主に選出し、分析対象とした。分析にあたって、読み聞かせを「する側」と「してもら側」の観点から「保育者」と「幼児」、及び読み聞かせを行う集団の質の観点から「通常の集団保育」と「特別な支援を要する幼児に焦点を当てた集団保育」の観点に大別し、幼児教育のねらいの達成に向け、充実した絵本の読み聞かせのあり方に関する検討を試みる。

(1) 「通常の集団保育」を対象とした絵本の読み聞かせに関する研究

1) 保育者を対象とした研究

まず、読み聞かせをする側である保育者の実践を取り上げた研究として、「①読み聞かせのねらいと保育者の役割」、及び「②読み聞かせ場面における保育者の言動と内的過程に関する研究」の研究に類別し、概要を述べる。

①読み聞かせのねらいと保育者の役割に関する研究

保育者が行う絵本の読み聞かせは、主活動への期待感や意欲の向上を意図した「活動前の導入」、食後の休息や気持ちの切り替えを図る「活動の切り替え」といった明確なねらいのもとに行われることよりも、降園前に行われることが多いことが示されている(長瀬ら, 2003)。「降園前」の読み聞かせは、保育者の裁量に任された、比較的自由度の高い選書によって行われる(並木, 2014)。家庭ではどちらかという自分の興味のあることを中心に見たり、読んだりすることになるが、園では教師や友達の興味や関心にも応じていくもので幅の広いものとなる(文部科学省,

2008)。保育者が読み聞かせのためにどのような絵本を選択するかは、とても重要な課題と言える。

幼稚園教育要領（文部科学省, 2017）, 領域「言葉」の「3 内容の取り扱い」には、「(3)絵本や物語などで、その内容と自分の経験を結びつけたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにする（下線は筆者が加筆）」と記されている。また、「(4)幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること（下線は筆者が加筆）」と記載されている。新要領における領域「言葉」の記載内容においても、絵本や物語を通じてイメージ力を豊かに育むこと、豊かな言葉の獲得に結びつけることが出来るよう教材研究の充実が求められよう。以上から、読み聞かせを行うに際しては、読み聞かせの場を共有し、保育者や友達と心を通わせる中で「共に楽しむ」という集団ならではの側面を大切にしつつ、「個々にイメージを膨らませる」といった個の側面を生かす場を創り出す保育者の役割が期待されていると考えられる。

中村（1991）は、絵本の読み聞かせにおいては、「聞き手としての幼児に関する要因」、「読み手としての保育者・教師や親に関する要因」、「絵本自体に関する要因」、「絵本と読み手の両方にかかわる要因」、「絵本と聞き手の両方にかかわる要因」、「読み手と聞き手の両方にかかわる要因」、「絵本・読み手・聞き手の三者にかかわる要因」の7つの変数が関与することを指摘している。「聞き手としての幼児に関する要因」の具体例としては、性別・知識・理解力・情緒状態・興味や集中度、個と集団を挙げている。「読み手としての保育者・教師や親に関する要因」の具体例としては、発声の仕方・表現力・本の提示の仕方・態度・絵本についての理解度・幼児の発達や行動特徴についての理解度を挙げている。保育者が読み聞かせを多角的に捉える視点を有することは、読み聞かせの省察に活用でき、充実した読み聞かせへの手立てと成り得るであろう。

小寺・瀧川・玉置（2005）は、領域「言葉」に関する保育者養成のテキストを分析し、絵本を読み聞かせる保育者の役割を整理している。その結果、保育と絵本の関わりについて「絵本—幼児保育者」関係、「絵本—幼児言葉」関係、「絵本—幼児イメージ（想像）」関係の3つの視点を見出している。幼児と保育者が絵本を共有する関係性の中で、幼児が豊かな言葉を獲得したり、イメージを豊かにしたりする場とする保育者の役割が示されていると言えよう。具体的には、「絵本の選定者（環境の構成者）としての役割」、「絵本を媒介にして幼児の言葉のもつ意味やイメージを育てる援助者としての役割」、「言葉が思考の媒介機能を果たすことを理解して物語の中身（絵本の内容）を楽しみ、イメージを広げていく過程を援助する役割」の3つの役割に集約されている。

読み聞かせの選書については、質問紙やインタビューによる調査研究が進められている。梶谷ら（2015）は、絵本を選ぶ際に何よりも大切にしたいこととして「物語の質」を挙げる。その際、絵本の文章と絵のバランスが重要であると指摘する。松居（1990）は、「絵の与えるイメージと文章の呼び起こすイメージがちぐはぐに

なったりしますと、幼児の心の中に混乱がおき、物語の世界へと入っていきません。文と絵のつくりだすイメージは同じ質のものであり、よく調和していなければなりません。」と述べている。また、中川（2013）は、年齢に応じて楽しめる絵本を選択すること、繰り返し読んでも飽きない、見るほどにますます好きになる本が適書であると指摘している。藤岡・伊藤（2016）は、幼稚園の3歳児の2クラスから4歳児、5歳児の各1クラスの3年間の読み聞かせリストを分析した結果、6割の絵本は3年間を通じて1回しか読まれていないこと、2回読まれているものは2割程度であることを明らかにしている。そのほとんどが3歳児クラスで読まれていると言う。季節や行事、虫に関連する絵本はその時期になると選ばれやすい定番となっている傾向や、入園当初には園生活を題材とした絵本を用いて園生活への親しみや慣れを促進する役割を担っていることを見出している。また、あらかじめ研究者が用意した複数の絵本の中から、目的別に読み聞かせたい絵本を選択させた研究においては、想像力をつけることを意識した場合は、保育経験年数の長さには関係なく文章数・文節数ともに少ない絵本が選出される一方、保育経験の短い保育者は絵本の選択に幼児の姿を結びつけることが困難であること、6年以上の経験を積み重ねると次第に幼児の姿を照らし合わせながら絵本の内容を踏まえた選択を行うこと、さらに16年以上になると、絵本の読み聞かせという視点だけでなく、「考えるお手本になる」「幼児の目線が広がる」といった、育てたい幼児像をも見据えた選択が行われることを明らかにしている（佐藤ら、2007）。その他、主人公が「仲間はずれにされる」という否定的なストーリーを読み聞かせる際の配慮について検討した戸田・西山（2003）は、保育者が何を幼児に伝え、考えてほしいかといった問題意識を事前に明確化して読み聞かせを行うことにより、ストーリーを鵜呑みにするのではなく、その内容を幼児自身が考える機会とし得る有用性を指摘している。

②読み聞かせ場面における保育者の言動と内的過程に関する研究

幼児教育における絵本の取扱いは、小学校以降の教科としての「国語科」のように教師の指導の下、作品の主題を探求したり、登場人物の心情を推し量ったりすることではない。むしろ、読み聞かせの途中で保育者が発問したり、読後に幼児に感想を述べさせたりすることに対しては消極的な立場がとられる（松岡、1987）。

秋田・横山・寺田・安見・遠藤（1998）は、保育経験の短い保育者（7年未満）と長い保育者（14年以上）を対象に、録画された自身の読み聞かせ場面を視聴する再生刺激法を用い、読み聞かせ場面の行動の意図を問う調査から、読み聞かせの熟達化に関する検討を行った。その結果、経験によって着目する観点自体に大きな差異は見られなかったものの、保育経験の短い保育者は幼児の注意を引き付けるため、声色を変える等、「読みの工夫」を行う特徴を見出した。一方、保育経験の長い保育者は、幼児が集中できる雰囲気作りといった幼児の自発性を引き出す工夫や、個に応じて繰り返し読むこと等、個別に読むことも視野に入れ、1回の読み聞かせをより長い保育スパンの中に位置づけていることを示した。

奥山・香曾我部（2008）は、参与観察により収集した事例から、読み聞かせ場面で幼児が他児とイメージの共有を生み出す要因とその過程、及び幼児のイメージの共有を生み出す保育者の専門性と資質について検討を行った。その結果、保育者が「視

線」と「ページをめくる」という身体的な行為を通じて、幼児の発話や興味、関心、聞く姿勢等をコントロールし、幼児のイメージの共有化を援助していることが明らかにされた。また、保育者は日常的な生活の営みを通して培った幼児理解をもとに、視線を向ける等の身体的な行為を個別に遂行しており、絵本の読み聞かせにも日常的な幼児理解が適切な援助に活かされていることを指摘している。

並木（2012）は、幼稚園新入園の4歳児を対象に、絵本の読み聞かせの構成や保育者の動作及び発話が幼児の発話に及ぼす影響について検討している。新入園の4歳児が母体となるクラスの一員として集団での読み聞かせを楽しめるようにするためには、個々の幼児が幼稚園生活に慣れ、保育者やクラスに安心感を持つことを必要条件として示した。さらに、読み聞かせの導入においては、時期ごとに同じ座り方をし、手遊びをして絵本に入るといったルーティーンを守ることによって流れが習慣づけられ、幼児自身が次の活動に期待を抱き、自分から行動するというねらいが達成されることを明らかにしている。また、絵本の各場面では、大きく抑揚や身振りをつけることなく、必ず幼児に「視線」を向け、「表情」豊かに読んだり、地の文の読後は次のページをめくるまでにゆっくりと間を取ったり等、幼児が絵をじっくり見て絵本に対する個々のイメージがため込まれるよう、配慮していることも明らかにされた。奥山・香曾我部（2008）の指摘のように、「視線」という非言語的な働きかけが幼児の集中力を途切れさせることなく、また、集団の中であって個々のもつイメージを尊重する重要な実践であることが伺われる。

非言語的な働きかけとしての「視線」について、さらに奥山・松述・香曾我部（2014）は、絵本の読み聞かせにおける保育者と幼児双方の視線の変容プロセスを分析した。その結果、保育者の視線には3つの注視が存在し、読み聞かせの中で変容していくことを明らかにした。まず、読み聞かせ前の段階においては、保育者の側にいる幼児の視線の角度や首の角度に配慮した注視、離れている幼児が他に注意をそらすことなく読み聞かせに誘導する意図で用いる注視といった「保育者の意図的な注視」が見出されている。続く読みの最中には、幼児一人一人の言動や表情の変化に対応する「幼児の反応に対する即時的な注視」、物語の最後には、次の活動への読み聞かせの効果を高めるため、幼児がどの部分を見ているのかをより詳細に捉えようとする「幼児理解を深めようとする細やかな注視」の存在を指摘した。読後には、幼児の読み聞かせに対する満足感を表情から読み取ると共に、これまでの幼児理解を更新し、次の活動に更新情報を活用するという、幼児理解と保育実践の往還を示した。次の活動が始まってからも、幼児の活動の様子から読み聞かせの効果を評価することもあり得る。とりわけ、このような丁寧な見取りは、不特定の複数の幼児ではなく、反応の良い子や悪い子といった特定の幼児を対象とし、読み聞かせの教育的な効果を次の活動に効果的に結びつけようとする保育者の意図が見出されている。教育的な効果については、うまく次の活動につなげなかった場合も含まれる。保育者は読み聞かせに対する幼児の身体の動きや在り様を丁寧に読み取り、心情の理解や評価を行うことが示された。保育者は、絵本を介して幼児との間に三角構造の相互作用を生み出し、読み聞かせに際しての幼児の姿から読み取った情報をもとに内省や自己内対話を進め、さらなる幼児理解に活かす。このことから、日常的に頻繁に行わ

れる絵本の読み聞かせは、幼児のみならず、保育者にとってもより良い保育を指向するための重要な学習の好機となることが分かった。

2) 幼児を対象とした研究

①読み聞かせの発達的变化に関する研究

高橋・徳渕(1994)は、集団での読み聞かせ場面における幼児同士の相互作用、及びその年齢による相違点を明らかにするため、幼稚園の3～5歳児クラスを対象に読み聞かせの途中で中断し、幼児たちにその場面に関する質問を行い、その発話を比較検討している。その結果、年齢の上昇に伴い発話量が増大するという量的変化が認められた。また、3歳児の発話は散発的で幼児間の発話にほとんど影響が見られず独立していたが、4歳児になると他児の発話に誘発される発話が増加した。しかしながら、他児の発話を単純に繰り返す「繰り返し型発話」が多く認められた。5歳児では、4歳児のような「繰り返し型の発話」ばかりでなく、新たな情報を付け加える「発展型発話」が顕著に増大した。このことから、5歳児になると他児の発話に対して自らの発話を返しながら発話内容が発展し、発話数が増加するという、発達的な変化が推察された。

小林(1997)は、年齢(3～5歳)・性差、座席の位置、同じ絵本の繰り返しの要因が集団での絵本の読み聞かせにおける幼児の反応への影響について検討した。その結果、年齢の上昇に伴い絵本への興味を持続すること、2回目の読み聞かせではすべての年齢の幼児が絵本への興味を持続できるようになることが明らかにされた。さらに、2回目の読み聞かせでは、内容について友達と顔を見合わせて微笑んだり、会話したり等、友達と一緒に楽しむ姿が見られるようになった。同じ絵本を繰り返し読み聞かせると内容への理解が進むため、個々のイメージがより明確になり、絵本の内容を介したコミュニケーションが幼児間で促進されることを明らかにしている。

横山(2003)は、5歳児を対象に絵本を集団で読み聞かせる意義について、シリーズ絵本に着目して検討している。同一絵本の繰り返しと違い、シリーズ絵本は、登場人物は同じで異なったストーリーが展開される。登場人物への理解はあるものの、内容には新奇性がある。なお、この絵本の選択に際しては、シリーズ絵本であるという理由以外に、他の保育場面で幼児に馴染みのあるねずみを題材としていることが挙げられる。絵本の読み聞かせ場面をあえて日常保育との連続性の中で捉えている点にも特徴がある。幼児はシリーズものであることを理解した2冊目において、より積極的に場面に参加していること、「自己」に関連した発話が多いことが明らかにされた。しかしながら、シリーズ絵本間を比較した発話は見られず、絵本の1冊1冊それぞれに、幼児が主人公と向き合っていると推察されている。また、本研究の対象クラスでは、日常の保育から「ちゅーすけ」というねずみのパペットが用いられていた。このパペットは、クラスの一員として日常的に登場する。取り上げた「ねずみくんシリーズ」の絵本のねずみとこのパペットがしばしば同一視され、パペットを媒介に絵本を自分たちの世界に引き寄せ、より現実に近い世界として絵本世界を捉えているという特徴が見出された。シリーズ絵本のねずみくんのストーリーは、

いわばパペットの物語として体験されていたと推察している。このことにより、絵本の世界が架空の世界ではなくなり、より日常的な「自己」と対比し、意見や感想を述べずにはいられなくなったのではないかと考察している。このパペットは、不安になりがちな年度初めに登場し、幼児達と共にクラスに参入した特別な存在である。本研究から、絵本の読み聞かせは架空の物語世界を共に楽しむという独立した保育活動としての側面だけでなく、集団生活を送る中で積み重ねられる共有事項を踏まえて物語世界を共に楽しむという、日常生活との連続的な保育活動としての側面が幼児の物語世界の楽しみを一層深化させることにつながることが分かった。

近藤・辻元（2007）は、4歳児クラスの読み聞かせ場面を対象に、絵本の捉え方に関する5歳前半と5歳後半の言動を比較検討し、発達的な観点から分析している。その結果、絵本の内容に直結した「意見表出」及び「感情表出」については、5歳前半で多く観察された。一方、「友人と絵本のことで話し合う」については、5歳後半でのみ観察された。5歳後半になると、隣の子と話し合ったり、2人で笑い合ったり、うなずき合ったり等、友達を意識した姿が見られるようになることを示した。前述の高橋・徳淵（1994）や小林（1997）の結果を支持する結果であり、友達との相互作用の中で、読み聞かせを一緒に楽しめる力がついてくることを示していると言えよう。また、「感情の身体化」として、絵本を聞いた反応が言動に直結しやすい特徴が5歳前半に認められ、後半には減少することが示された。これは、高橋・徳淵（1994）が指摘した「繰り返し型の発話」に類似した特徴であると言え、5歳前半ではとりわけ、言葉の響きや音の面白さに興味をもち、繰り返す姿が推察され、個別に楽しむ過程にあると捉えられる。絵本の各場面に反応するにとどまり、内容を1つのストーリーとして全体的に理解する力に乏しく、結末がわかると、その時点で絵本への集中力も低下することが明らかになった。一方、5歳後半には、大きな感情表出は認められなくなり、友達と話す姿は見られても、思ったことを口にする姿も減少した。5歳後半になると、絵本のストーリー展開を楽しみながら、個別の言動については集団での読み聞かせのマナーを習得しつつあることがうかがわれた。近藤・辻元（2009）では本研究（近藤・辻元，2007）の追試を行い、同様の発達の様相を見出している。

②読み聞かせの環境が幼児に及ぼす影響に関する研究

中澤・杉本・衣笠・入江（2005）は、絵本の読み聞かせにおけるグループサイズに着目し、グループサイズ（1人群，3人群，6人群）が5歳児の物語理解やイメージ形成に及ぼす影響について、実験場面を構成して検討している。その結果、読み聞かせ中の発話数や発話内容にグループサイズの有意差は認められなかったが、3人群が最も読み聞かせに集中することが明らかになった。読み手（保育者）―聞き手（幼児）の絵本の内容に関する相互作用も3人群で最もスムーズであったが、幼児同士の相互作用に有意差は見られなかった。絵本の理解度は3人群の幼児が有意に高いこと、また、性別に因らず、3人群において「物語に即した話」や「新展開のある独創的な話を作ること」が最も活性化するという結果であった。3人というグループサイズが絵本の理解やイメージ形成において有効であることを明らかにした。また、グループサイズの要因を込みにして分析した結果からは、発話数と理解

度やイメージ形成との関連が見出された。具体的には、絵本の内容に関する質問やコメントと理解度やイメージ形成との関連、読み手と聞き手の相互作用数と理解度やイメージ形成との関連が認められた。聞き手である幼児が自由に絵本の内容について発話でき、そこに適宜、読み手である保育者が応じる環境が内容への理解度を高め、豊かなイメージ形成を導くことを示す結果である。このような読み聞かせは、読み手と聞き手の一対一の関係において実現するわけではなく、他児の発言も聞き取れる規模の集団であることの重要性が示されたと言え、集団保育の利点を実証された意義ある知見であると考えられる。

大元・青柳（2012）は、5歳児クラスの幼児を対象に、新奇性の高い1冊の絵本を集団に読み聞かせることを通して、集団規模、性差、座席による違いの観点から幼児の反応の特徴をグループの大きさを1名、3名、24名とする実験的な設定状況のもとに検討している。その結果、読み聞かせに対する正・負のいずれの反応においても、グループサイズが大きくなるほど活発化し、女児よりも男児にその傾向が強いことが示された。また、グループサイズが大きくなるほど反応が多彩になる一方、絵本に興味を示さず、よそ見をしたり、絵本と関係のない発話をしたりといった負の行動の増加も認められ、24名という大きなグループサイズでは、集中を維持することの難しさが顕著であった。さらに、1名や3名というグループサイズの場合は読み聞かせの最初から、内容に関心を示す正の反応が出現したが、24名のサイズではよそ見が多く、読み進められるに連れて関心を向ける正の反応が増加する特徴が見られた。グループサイズの違いによるその他の特徴としては、1名の場合、絵本への集中は保たれたが、笑い声や発言はなく、表情にも変化が見られなかった。3名では、発言や笑い声がよく出て、非常に活発な反応が現れた。その背景に幼児同士の相互作用が活発で、楽しみを共有しながら聞くことができることを指摘している。24名グループでは、常に誰かが動いたり話したりと落ち着かない雰囲気ではあったが、読み手と絵本がよく見える位置に居る幼児は絵本に集中できていたことから、大きなグループサイズの場合は場の構成という、物理的な環境がもつ課題の克服が欠かせないことが実証された。

（2）特別な支援を要する幼児を対象とした読み聞かせに関する研究

（1）では、通常の保育における絵本の読み聞かせに関する実践研究を概観したが、ここでは特別な支援を要する幼児を対象に絵本の読み聞かせについて検討した研究を概観する。

1) 保育者を対象とした研究

近藤・辻元（2008）は、図書館や小学校、幼稚園、保育所などにおける読み聞かせ実践者を対象にアンケート調査を行い、ADHD児のように多動や不注意といった傾向のある幼児が集団での読み聞かせの対象に含まれている場合の配慮について検討した。その結果、対象児の興味に合った絵本の選択が重要であることを示した。また、話を聞く位置は膝の上など読み手のすぐ近くで、できるだけ気が散るような刺激を避ける環境設定が有効であるとされた。読み聞かせの導入においては、手遊び等の活動から始めることにより、読み聞かせが始まることを意識化させることが重要視

されていた。読む過程では、無理に話を聞かせようとせず、積極的無視が有効とされた。対象児の目を見るなど、対象児との個別の関係をあえて作りながら読む配慮がなされていた。読後は聞く態度を褒めるなど、良い態度を適宜評価して返すことの重要性が示された。

2) 幼児を対象とした研究

近藤・辻元（2011）は、ADHDと診断された幼児を対象に絵本の読み聞かせを行った実践の録画データの分析によって、一場面完結型の絵本とストーリーのある継時的な内容で構成される絵本に対して、聞き手であるADHD児にどのような影響を与え、興味がどのように変化するか、発達的な検討を行った。その結果、必ずしも一場面完結型の絵本の方が注意を集中するわけではないこと、絵本に楽しめる要素があれば一場面完結型の絵本であっても、ストーリーのある継時的な絵本であっても楽しむことができることが分かった。また、ADHD児は読み聞かせの環境に容易に影響されるものの、全く聞いていないわけではなく、絵本の読み聞かせに積極的に参加しようとしていることが明らかになった。

聞き手の発達年齢に従って、まずは一場面完結型の絵本の方を楽しむ段階、続いて一場面完結型の絵本からストーリーのある継時的な絵本への移行段階、さらに、ストーリーのある継時的な絵本の方をより楽しむ段階へと進んでいくことが明らかになった。しかしながら、定型発達児に比べて、ADHD児の場合は、1年ないし2年程度、絵本の理解が遅れる傾向があると考察された。その原因として、ADHD児に特有の読み聞かせに関係のない局外刺激への転導や注意の持続の困難といった、注意に関わる特性にあることが示された。また、ADHD児には内言の発達についても1年ないし2年程度遅れるという見解が示されていることからすると、自己制御の困難さが絵本理解の阻害要因になっている可能性も否定できない。これらの知見は、ADHD児がその障害上の特性ゆえにストーリー性のある継時的な絵本を楽しむことができない、注意を集中させて聞くことができないという理解を否定するものであった。ADHD児の場合、あえて、暦年齢より1～2歳下の幼児でも楽しめる内容の絵本を選択したり、あまり長くない絵本を選択したり等、読み手の配慮によって絵本の読み聞かせを楽しむことが可能であることを示唆している。

近藤・辻元（2012）は、3～5歳児のADHD幼児を対象に連続して2回の絵本の読み聞かせを行い、繰り返し読み聞かせる意味について検討した。その結果、2回目は1回目よりも聞き手の反応が良くなり、1回目より多くの感情表出が認められた。また、2回目で初めて面白いと捉える反応も認められた。これは、1回目の読み聞かせが理解の手がかりとして機能したことを示唆し、ADHDの障害特性としての予期や選択的な注意の機能を促進することにつながり、繰り返し読み聞かせることの有用性を指摘した。

近藤・山本（2013）は、障害児通園施設の自閉症スペクトラムと診断された幼児1名（2歳～3歳の縦断研究）を対象に、集団での絵本の読み聞かせを通じた発達支援の方法について、共同注意と情動の共有の視点から1年間の実践観察を行った結果を報告している。人やモノへの興味が乏しく、自分の世界に入り込んでしまっているように見える自閉症スペクトラムの幼児であっても、好きなことに関連した絵

本を繰り返し集団で読み聞かせることにより、次第に「集団の視線への追従」が見られるようになり、さらに、一緒に見ている母親や保育者といった身近な大人と絵本を介して個別の三項関係を生み出すことを示した。継続的に一定の時間を確保して行う集団での絵本の読み聞かせは、自分の関心の有無で参加の自由が認められていけば、少し離れた場所からみんなが見ている世界を把握しやすく、段階的に集団の視線への追従、共振・模倣、情動の共有を生じさせる契機となる可能性が示された。

Ⅲ 総括と今後の課題

1 保育における集団での読み聞かせの有用性と実践のあり方

絵本の読み聞かせ場面における幼児の発話やその他の反応は、年齢に沿って変化し、とくに、4歳児クラスから5歳児クラスに至る過程で集団での読み聞かせの効果が期待されることが分かった。

3歳児クラスの発達としては、集団でありながら、保育者と幼児の個別の関係性が優位な中で読み聞かせの体験が進む、タテの関係が中心となる場であると推察される。続く、4歳児の時点では、徐々に幼児間の相互作用が広がり、他児の面白い発話を繰り返したり、隣の幼児と話し合ったり、2人で笑い合ったり等、他児を意識した姿が見られるようになる。友達と一緒に楽しむ共有化が進む。これは保育者とのタテの関係に加え、幼児間のヨコの関係が活性化し、体験の充実が図られたことを意味する。さらに、5歳児になると、友達と話す姿は見られても、不用意に思ったことを口にする姿は減少する。絵本のストーリー展開を楽しみながら、集団での読み聞かせのマナーを心得た態度を示しつつ、個別の言動の表出を調整する姿が見られるようになる。他児の発話を聞いて、それに対する自らの発話を返す発展型のやりとりが可能となり、発話数の増加も見られる発達過程に至る。このような絵本の読み聞かせを通じた発達過程は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である「言葉による伝え合い」を実現する過程の姿そのものであることが見出された。

日常の保育に頻繁に用いられる集団での「絵本の読み聞かせ」は、長くとも10分程度の活動である。日々、保育者が多様な研究から得られた知見をもとに、効果的な環境を創り出すことによって、領域「言葉」における幼児の確かな成長を促す保育の実現が可能であることが確認された。

また、周知のように、文部科学省の調査結果から、平成24年12月に「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は6.5%と公表しているように、幼稚園や保育所等においても同様か、それ以上の割合で気になる幼児が存在する。集団での絵本の読み聞かせにおいて、各幼児の発達の可能性を拓くには、特別な教育的支援を要する幼児への対応についても識見を深め、効果的な実践に移していく力量が求められる。発達障害の特性をもった幼児に対しては、継続的に一定の時間を確保して行う集団での絵本の読み聞かせは、短時間のルールが少ない集団活動として比較的取り組みやすい。自分の関心の有無で参加の自由が認められ、個別に絵本の内容を楽しんだり、時には友達や保育者の言動に関心を寄せたりしながら、自分なりの楽しみ方が保障される。その過程で、友達との相互のやりとりが現れ、楽しさを共有する体験へと発展させることが出来れば、全

ての幼児にとって有用な育ちの場として、活性化するであろう。

2 今後の課題

絵本の読み聞かせ場面における幼児の発話やその他の反応に関する研究結果から、集団での読み聞かせについては、4歳児クラスから5歳児クラスにおいてその効果が期待されることが明らかになった。しかしながら、取り上げた研究は実験的な場面に基づく知見や、各年齢の横断的な分析によるものが多かった。また、絵本の読み聞かせは、毎日の保育の一場面であり、保育全体の流れの中で前後の文脈や保育者、友達との日々の関係性と切り離せない質の実践と言える。日常の保育における縦断的な時間軸を通して、幼児の変化を詳細に捉えることが課題である。

また、5歳児クラスの幼児の読み聞かせ場面の姿を捉え、一斉指導、設定保育という形態の特徴から、小学校教育との接続のあり方としての検討も可能ではないかと考える。あわせて今後の課題としたい。

引用文献

- 秋田喜代美・横山真貴子・寺田清美・安見克男・遠藤雅子：「読み聞かせを構成する保育者の思考と行動（3）—読み聞かせはどのように熟達化するのか？：経験年数による比較—」日本保育学会大会研究論文集（51），546-547，1998年。
- 出口明子・桑原奈見：「幼児教育における科学絵本の活用可能性—幼稚園を対象とした調査を通して—」宇都宮大学教育学部紀要第2部 65，21-28，2015年。
- 藤岡久美子・伊藤恵里奈：「幼稚園における絵本の読み聞かせの選書の分析—3年間の記録から—」山形大学 教職・教育実践研究 11，59-68，2016年。
- 堀川真・今野道裕：「絵本における「比喩的表現」：「大きさ」の比喩的表現を幼児はどうとらえているか」紀要第9巻91-97，2015年。
- 梶谷恵子・脇明子・湯澤美紀・片平朋世：「保育者を対象とした絵本選書の研修—王通テーマによる絵本三冊の比較—」ノートルダム清心女子大学紀要．人間生活学・児童学・食品栄養学編 39(1)，122-141，2015年。
- 菊池達夫：「幼児教育における地図絵本の活用と意義—北海道の地域・環境認識を試みとして—」北方圏生活福祉研究所年報第13巻，2007年。
- 小林真：「集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応—年齢・性差と座席の位置による影響について—」児童文化研究所所報 19，1-13，1997年。
- 小寺玲音・瀧川光治・玉置哲淳：「保育実践における絵本の持つ意味に関する考察—幼稚園教育要領・保育所保育指針および保育内容「言葉」のテキスト類の比較からみた保育者の役割—」エデュケア 25，31-45，2005年。
- 近藤文里・辻元千佳子：「絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用（3）—5歳前半児と5歳後半児の聞き手の比較—」滋賀大学教育学部紀要，教育科学No. 57，pp. 27-38，2007年。
- 近藤文里・辻元千佳子：「絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用（6）—絵本の読み聞かせ実践者へのアンケート調査—」滋賀大学教育学部紀要，教育科学No. 58，pp. 17-29，2008年。

- 近藤文里・辻元千佳子：「絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果（3）—物語の構造が異なる2種類の絵本への反応—」滋賀大学教育学部紀要，教育科学No. 61, 1-13, 2011年.
- 近藤文里・辻元千佳子：「絵本の選択がADHD児の読み聞かせに及ぼす効果（4）—繰り返し読み聞かせることの意義について—」滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要20, 9-15, 2012年.
- 近藤えみ子・山本理絵：「集団での絵本の読み聞かせを通しての自閉症スペクトラム幼児の発達支援」保育学研究51（3），318-330, 2013年.
- 松居直：「絵本・物語るよろこび」福武書店，23頁，1990年.
- 松岡享子：「えほんのせかい こどものせかい」日本エディターズスクール，13-22頁，1987年.
- 文部科学省：「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf, 2012年. (2018年12月27日閲覧)
- 無藤隆：「幼稚園教育要領の保育内容5領域の改訂」，一般社団法人保育教諭養成課程研究会NEWS LETTER」，3, 2017年.
- 長瀬荘一・幸本由紀子・宮本佳郎：「幼稚園における絵本の語り読みの実態」神戸女子短期大学論考48, 123-137, 2003年.
- 中川李枝子：「本・子ども・絵本」大和書房，104-106頁，2013年.
- 中村年江：「絵本の読み聞かせに関する心理学的研究—絵本の読み聞かせに関する変数と望ましい読み聞かせの条件の検討—」読書科学35, 149-159, 1991年.
- 中澤潤・杉本直子・衣笠恵子・入江綾子：「絵本の読み聞かせのグループサイズが幼児の物語理解・イメージ形成に及ぼす影響」千葉大学教育学部研究紀要53, 203-210, 2005年.
- 並木真理子：「幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響」保育学研究50(2), 165-179, 2012年.
- 並木真理子：「幼稚園入園年齢4歳児への読み聞かせにおける絵本の選書理由および保育者の読み聞かせスタイルの検討—「降園前」の読み聞かせ場面に着目して—」チャイルド・サイエンス：幼児学10, 66-70, 2014年.
- 成家雅史・細川太輔・田中成行・松原洋子・菅俊輔・福田淳佑・笈理沙子：「小学校・中学校における話す・聞く力の再検討（1年次）：生活への活用を目指して」東京学芸大学附属学校研究紀要，42, 65-75, 2015年.
- 奥山優佳・香曾我部琢：「想像世界の共有化を修辞する保育者の身体技法—クラス活動における絵本の読み聞かせの相互行為分析より—」東北生活文化大学東北生活文化大学短期大学部紀要第39巻41-47, 2008年.
- 奥山優佳・松述毅・香曾我部琢：「クラス活動の絵本の読み聞かせにおける相互作用の意義：保育者と幼児の視線の変容プロセスの分析より」東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要4, 73-82, 2014年.
- 大元千種・青柳恵里香：「絵本に対する幼児の関心に及ぼす読み聞かせのグループサ

- イズの影響」筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要7, 167-178, 2012年.
小澤郁美・徳永美紀・湯澤正通:「グループ活動による絵本の情報共有が幼児の語り
に及ぼす影響」広島大学心理学研究第16号81-90, 2016年.
佐藤智恵・松井剛太・上村眞生・祝小力・趙京玉:「保育者の絵本選択の理由と経験
年数との関連に関する研究」幼年教育研究年報29, 59-64, 2007年.
高橋登・徳淵美紀:「集団での絵本のよみきかせ場面における幼児達の相互作用につ
いて」日本教育心理学会総会発表論文集36(0), 139, 1994年.
戸田有一・西山依里:「仲間はずれに関する絵本の選択・読み聞かせにおける保育者
の配慮」エデュケア 24, 33-45, 2003年.
辻元千佳子・近藤文里:「絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用
(7)―5歳前半児と後半児の聞き手の比較に関する追試的研究―」滋賀大学教育
学部附属教育実践総合センター紀要 17, 9-14, 2009年.
文部省:「幼稚園教育要領」1956年.
文部省:「幼稚園教育要領」1988年.
文部省:「幼稚園教育要領」1998年.
文部科学省:「幼稚園教育要領」2008年.
文部科学省:「幼稚園教育要領」2017年.
文部科学省:「幼稚園教育要領解説」2008年.
文部科学省:「幼稚園教育要領解説」2018年.
横山真貴子:「保育における集団に対するシリーズ絵本の読み聞かせ―5歳児クラス
での『ねずみくんの絵本』の読み聞かせからの分析―」教育実践総合センター研
究紀要12巻, 21-30, 2003年.
横山真貴子:「絵本の読み聞かせと手紙を書く活動の研究―保育における幼児の文字
を媒介とした活動」風間書房, 2004年.
横山真貴子・水野千具沙:「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義―5
歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から―」教育実践総合センター研究紀要17巻,
41-51, 2008年.

The Research Trends of Reading Picture-Books to Children in a Whole Group
Activity in Early Childhood Education and Care

Nohara AIZAWA*1, Mika KATAYAMA*2, Toshiyuki TAKAHASHI*2

Keywords: children, reading Picture-Books, whole group activity, childcare
person, collaborating process

*1 Graduate School of Education, Okayama University (Master's Course)

*2 Graduate School of Education, Okayama University
